

【対象・方法】 プレゼンテーションの評価項目は7項目とし、それぞれが4段階の達成度評価で構成されるルーブリック評価表を作成した。プレゼンテーション時にこの評価表を用いて教員による評価、学生間相互評価、自己評価を行った。本学倫理委員会の承認を得た後、2017年にプログラムに参加した医学科第5学年82名を対象として、教員・他の班員の評価と自己評価との相関を分析し、更に自己評価が高い群(>70点、A群)、低い群(<50点、B群)、その中間の群(50-70点、C群)に分け、各群で評価者との相関を調べた。また、終了後に学生の意識変化をアンケート調査した。ピアソンの相関係数は統計ソフトで算出した。

【結果】 教員自己評価には高い正の相関が見られた( $r=.6838$ 、 $p<0001$ )が、班員自己評価には相関を認めなかった( $r=.1243$ 、 $p=.26$ )。自己評価点数別の検討では、C群のみ評価者と有意な相関が見られた( $.3526$ 、 $p=.0159$ )。プログラム終了後のアンケート調査に44名(回収率53.7%)が回答し、「他者を評価することの難しさ」(24%)を訴える学生が多い一方、「他者の目を意識できた」、「またやってみよう」という意見もほぼ同数見られた。

【結論】 教員評価と自己評価間には予想以上に強い相関があった一方、他者からの評価との間に相関がなかった。これは適正に自己評価できる学生がいる一方、経験不足ゆえ極端な自己評価に陥る学生も多いことを反映し、その改善が今後の課題と思われた。

### P3-39.

#### 若年健常者における糖負荷試験と食後高血糖に対する予防医学的効果の検討

(病態生理学)

○山下 香、華藤 恵美、和田 英治  
林 由起子

(大学院博士課程2年公衆衛生学、医師・学生・研究者支援センター)

天笠 志保  
(栄養管理科)

杉山 恵子  
(腎臓内科)

菅野 義彦

【目的】 長寿大国と言われる我が国において、健康

寿命に大きな影響を与えているものの一つに糖尿病が挙げられる。一昨年、医学科2年の生理学実習で実施した糖負荷試験において、耐糖能異常が示唆される学生が予想外に多く認められたことから、若年層の糖尿病予備軍が数多く存在する可能性が考えられた。そこで本研究では、糖負荷試験で異常値を示した学生に対し日常生活における意識変化を促すことにより食後高血糖を改善しうるかを検討し、将来的に糖尿病の発症リスクを低減させることを目的とする。

【方法】 生理学実習における糖負荷試験の前後に運動負荷(早歩き、階段昇降、パワープレート)を行い、血糖値の変動に対する運動効果を検討した。同時に尿糖の有無、BMI、体脂肪率、握力を測定した。実習で耐糖能異常が疑われた学生のうち、希望者6名を対象に糖負荷試験の再検、ヘモグロビンA1cの測定、栄養指導を行い半年後にHbA1cを再検した。

【結果】 実習における糖負荷試験の結果、女子60%(28/47名)、男子34%(26/76名)が異常値を示した。糖の摂取前、摂取後に関わらず運動負荷を行った場合、血糖上昇曲線下面積は縮小し、特に異常値を示した男子、女子ともに面積の減少が大きかった。栄養指導を受けた6名の3ヶ月後のヘモグロビンA1c値は全員で低下した。

【考察】 実習における糖負荷試験で異常値を示した学生の中に日頃から運動を全くしていないという学生は少なく、また細身の学生が多かった。健康診断時に正常と判断されているにも関わらず、糖負荷試験で異常値を示した学生が多いことから、定期的な運動による骨格筋量の増加を図ることは勿論のこと、若年者であっても食後高血糖を抑えるような適切な栄養指導を積極的に進める必要がある。将来的には若年者の健診方法を再検討する必要があるかもしれない。